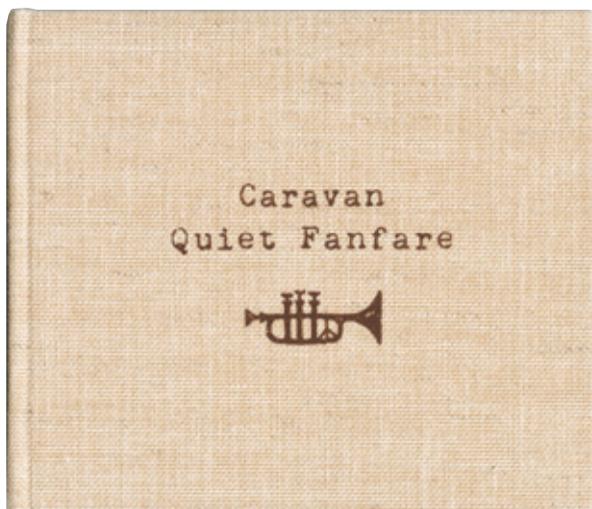


# Music

## 夢みたいな人生のトリップを。 キャラバンの『Quiet Fanfare』

Text: George Cockle  
文/ジョージ・カックル



"Life is a dream  
Life is a gas  
Life is a trip"  
(サンティアゴの道より)

山を登る時、その目的は頂上にたどり着くことではない。途中の景色や、その時の自分の気持ち、時間を大事にしたい。サーフトリップも同じだと思う。サーファー達はいい波を探してよく旅に出るが、毎回いい波にあたるわけではないよね。いくらハワイでもバリでも、いい波に巡り合わないときもある。俺もハワイで2週間、毎日雨だったことがあった。しかもすごく寒くて、ジャケットを着なければいけないほど。天気が悪いハワイは、それまで経験したことがないサーフトリップだった(笑)。

こんなこともあった。俺がその昔、サンフランシスコに住んでいる時、友達とロスへ車で仕事に行ったことがあった。普段だったら、海岸線のハイウェイ1でいろんなポイントをチェックしながら帰ってくるけど、俺達は通ったことがない道で帰ろうということになり、ハイウェイ101も、ハイウェイ5も使わず、その二つのハイウェイの間の、噂しか聞いたことのなかった小さい道をたどりながら帰ってきた。途中、サンタバー

バラの北から、牧場のゲートのようなところを通り、野原を横切る道に入った。次第にその道は看板も見当たらない小さな泥道になってしまった。

だが、その道を何時間か走ると、ゆっくり流れている浅い川にぶつかり、その川沿いを少し走っていくと、一軒のお店にたどり着いた。店に入ると、バーカウンターといくつかのプラスチック製テーブルの周りには、いくつかのプラスチックの椅子が並んでいた。テーブルには誰もいなかったけど、そのカウンターには圧倒されるほど遅い、何人かのカウボーイと道路工事の男達がいる。俺達も出来るだけジョン・ウェインのように遅くカウンターに向かって歩いて座った。すると、髪も髭もぼさぼさなバーテンダーにこう聞かれた。

「ここ初めて？」俺達が答える前に彼は「氷はないから、ウイスキーストレート、缶ビールかポップだけだ」と言ってきた。そして、何か食べ物あるかと俺達が聞くと、彼は笑って「サンドウィッチかチップス」と答えた。話を聞くと、その店には水道が繋がっていないため、食器は洗えない。よくピクニックで使う紙コップと紙皿しかないという。店のライトや冷蔵庫といえば、外にある自

家製のガスジェネレーターにつながれている。トイレは外にあり、アメリカの昔の西部劇によく出てくる、人が一人座れるぐらいの木造のアウトハウス。手洗いは井戸水だ。店の中にいる男達の会話をこっそり聞いてみると、ピストルとライフルの話をしていて、その一人は自分の足を酔っぱらって撃ってしまった話だった。不思議な光景だった。でも、これが人生のサーフトリップ。いつもと違う道を選んだからこそ経験できたことだ。

そんな旅に似合うのが、キャラバンの『Quiet Fanfare』だ。夕日を見ながら聴きたい音楽もあれば、海から上がってから聴きたい音楽もある。そして旅に出る時に聴きたい音楽もある。キャラバンの名の通り、彼にとって旅と言うものの存在は大きいのだろう。キャラバンの音楽からは様々な風景が浮かび、様々な匂いがしてくる。このCDを聞きながらこれからの夢みたいな人生のトリップを想像してくれ。



ジョージ・カックル ● 60～70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴40年の親父サーファー。  
[www.whatsupmusicinc.com](http://www.whatsupmusicinc.com)